

京都・本能学区の公開工房ツアー・明倫学区のまち歩きに参加して

大阪産業大学 塚本直幸

私も下京区の生れで（烏丸万寿寺）小さい頃の思い出しかないのですが、まわりに職人さんのうちがたくさんあって、友達のうちへ行くと、人がたくさん働いていましたが、これらのうちが連携して、まち全体でひとつの工場のようなプロセスとして機能しているとは、先日まで思い至りませんでした。

職住が一体となったまちというと、最近ではイタリアに行った時に感心したものでしたが、京都がそうやったんやね、と妙な感激を。というか、かつては（今でも）ものづくりはこういう形で日本全国、全世界で行われていた（いる）んでしょうね。

経済効率では、従業員が工場に出勤して規模の経済でやった方がずっといいので、どんどん廃れてきている現実があるのですが、まちの伝統（ブランド）というのはこういう形式が支えているんだな、と実感しました。

と同時に、例えば伊勢で作られた型がイタリアのアパレル産業に二束三文で持っていかれた話など、堺の刃物ブランドの話とまったく同じとも感じ、日本の伝統的な産業保護政策の欠如を思い知った経験でもありました。あるいは、それを許容している日本の消費者の志向にも課題がいくつもあると感じました。

色々考えさせられて、貴重な機会でした。今後の研究（まちづくり）にも生かしたいと考えています。